

「この前の晩のこと、覚えている？」

寝間着の下で、葛城の指が動く。  
利生の乳首の形を確かめるみたいに、ゆっくりと円を描いて。

「ここを、こうして……」

指先が、わざとらしく何度も同じ場所を辿る。  
触れるか触れないかの距離で、焦らすように。

「たくさん、カリカリしたね」

低く、楽しげな声が混じる。

「利生ったら、よがり狂って啼いて、ほんとうに可愛かったなあ」

言葉で思い出させるだけでは足りないと言わんばかりに、指は円を描くのをやめない。  
かといえ、急にそれが止んで、余計に切ない刺激になる。

(……だめだ。思い出ただけで……)

乳首が、じん、と熱を帯びていくのを、利生ははっきりと自覚していた。

自分の意思とは裏腹に、快楽に攫われてしまった、あの夜のこと。

あれ以来、葛城の指が乳首に触れるたび、くすぐったさとも違う、むず痒くて、奥のほうをぞわりと撫でられるような感覚が、体の内側からせり上がってくる。

(……ちがう。これは、奉公だからっ)

何度もそう繰り返しても、体はもう知ってしまっていた。

この指が、どこをどう撫でて、どれだけゆっくり責めてくるのか。  
そして、自分がどこで声を堪えきれなくなるのか。

利生のお役目は、もはや寝床を温めるだけではなかった。

——乳首で奉公しているのだ。

この館の主・葛城の気分を損ねぬように。  
追い出されて、家元に返されることのないように。  
この胸の先で、忠義を尽くすしかない。

でも、最近になって——  
熱を帯び始めた乳首が、違う意味を帯びている気がする。

奉公のためなんてのは建前だ、と誰かに暴かれてしまいそうで困り果てていた。

(……こんな自分、嫌なのに)

触れられていない時も、葛城の指を思い出せば、乳首は疼いてしまう。  
自分でも知らなかった感覚に、奉公の形がいやらしく、最近歪みは始めている。

本来なら、男の体において何の意味も持たないはずの小さな、ただの突起。  
けれど、この寝所の中では違っていた。

繰り返し、優しく。  
時に、意地悪に。  
幾晩もかけて弄ばれながら、利生の乳首は少しずつ仕込まれていった。

触れられるたびに、びくんと跳ねるようになり、感じるたびに声を我慢することを覚えた。

くすぐったさと快感の狭間で、今ではただ指先で摘まれるだけで、息も絶え絶えになるほどに追い詰められてしまう。

けれど、まだ、絶頂の手前までだ。  
一度も、そこを超えたことはない。

“乳首だけで果てる”

という、その最後の一線だけは怖くて……。

今晚、少しだけ酒を飲んだ葛城は機嫌がいい。

「利生って、僕に乳首を弄られるの、本当は、大好きだよな？」

「ち、違っ……」

「すぐそうやって、嘘をつく。ほら、見てごらん。こんなに、つんと尖らせているくせに」

指先が、ふたつの小さな突起をそっと挟む。

「さて、今日はどうしてほしい？」

「旦那様……俺、ちゃんと、湯たんぽしますから……っ」

懇願にも似た訴えは、届かない。

葛城の瞳は冷静に、利生の乳首の状態だけを見ていた。

弄くりすぎて、腫れていないか確認してくれているのだ。

問題ないと分かると、今夜の卑猥な計画を耳元で囁いてくる。

「その乳首、右と左、交互に何度も摘まんであげようか？ それとも、また爪でカリカリ？ 痛い、好きだったよね？ それとも赤ん坊みたいに、ちゅうちゅ吸ってほしい？ ねえ、利生はどれがいちばん、好きなんだい？」

まるで寝かしつける子守唄みたい。

けれど、内容はどこまでも、淫らで容赦ない。

利生の耳は、葛城の声だけで熱を持つ。

鼓膜を通して、胸の先までじんわり疼き始めていた。

選べない。

選びたくなんか、ない。

けれど、反応してしまう体は、もう答えを出してしまっているようで……。

何が好きかなんて、自分自身でも分からない。

けれど、乳首だけで何度も蕩けさせられたことは、紛れもない事実だった。

今こうして、選択肢に並べられていることは、それが全て好きだろうと認めさせるための躰なのだ。

声も出せず、ただ布団の中で俯くしかできないのに、胸の先は無防備に葛城の指を待っている。

硬くなった乳首が何より雄弁だった。

「利生の乳首って、本当に正直でいい」

葛城がそう囁いた直後、両方の乳首をいきなり同時に摘んできた。

「——っ！」

びりっと、背筋に稲妻のような快感が走り抜ける。

胸の奥から、喉を突き破るような声が、止めようもなく零れ落ちた。

「あ……っ、ああ……っ♡」

耐えようとしたのに、背が自然に反ってしまう。

指先から伝わる刺激で、胸の先が焼けつきそうだった。

ただ摘ままれただけなのに——

まるでそこが性感帯として完成されてしまったかのよう。

気づいているのかいないのか、葛城の指は執拗に、左右を交互に、時に同時に指先に力を込めて、利生の弱点を探るように動く。

動いてはいけない。

声を上げてはいけない。

ましてや、当主を拒む仕草など、寝所に招かれた湯たんぽ役には許されていない。

そう、信じてきた。

それが、この館に仕える書生の務めだと。

……その戒めのせいで、快感が余計に苦しい。

動いてはいけないのに、どうしても体が震える。

声を堪えなければいけないのに、もう抑えられない。

「だめ……っ♡ それ、だめっ……っ♡ 旦那様あつ……♡♡♡」

悲鳴を上げて、葛城の手は止まらない。

むしろ、ここまで啼けるようになった乳首が可愛くて仕方がない、というように、育ちきった乳首の反応を、愛おしそうに確かめている。

これが、葛城家にやってきて夜ごと繰り返される利生の乳首奉公だった。

葛城の指がそこを摘み、捏ね、舌先でゆっくりと転がしてくるせいで、本来なら、男子には無用のはずだったその小さな突起が今ではすっかり、熱い快楽を拾い上げるための淫らな器官に変えられてしまっていた。

自分の体が変わってしまうのは嫌だ。

でも、葛城にこうされることは嫌いじゃない。

そんな自分に、利生は困り果てていた。

葛城の指が触れれば、そこはすぐに固くなり、唇が落ちれば喉の奥から情けない声がこぼれ落ちそうになる。

もう、ここはただの飾りなんかじゃない。

葛城の手によって、利生の体に唯一無二の役割が与えられた場所――

それが、この乳首だった。

(旦那様の指のせいで、着物の裏地や、シャツの布越しに擦れると……)

葛城に可愛がられるたびに、自分のどこが弱いのかを、嫌というほど自覚した。

そのせいで今では、ほんの少し擦れただけで、胸の先がじん、と疼き始めてしまう。

(こんなの……ふつうじゃない……っ)

日中でもふと気になってしまう。

胸元に視線を感じると、咄嗟に手で押さえてしまうことが増えた。

乳首や乳輪の大きさこそ、以前と変わらない。

……けれど。

指先や舌先がかすめただけで、背筋がぞくりと震えるほど感度が高くなっていた。

たまに、鏡で確かめる。

どこか色も前より濃くなったような気がする。

「ほら、カリカリいくよ」

という声で、現実に戻された。

「あっ、やめ……っ♡」

葛城の爪先が、硬く尖った乳首の先端をこすり上げるように、引っかくように、ゆっくと往復させてくる。

右へ、左へ、何度も。

執拗に。

ねちっこく。

ザリッとした感触が、布越しではなく、むき出しの肌に、直に触れてくる。

それは、まるで乳首の芯にまで染み込んでいくような、鋭い快感だった。

「んっ、あ……っ、ああっ……♡」

声が勝手に漏れる。

体が、びくびく。

乳首はさらなる快楽を予感して、疼き始める。

“カリカリ”は、夜通しかけて行われる葛城なりの「可愛がり」の合図だった。

そして同時に、利生の乳首が奉公のための器官として育てられる、儀式でもあった。

「ほら、乳首の先っぽをちょっとカリカリしただけなのに。こんなに、はしたなく、ぷっくり膨らんできた」

「あ……っ、気持っ……♡」

思わず言いそうになった、自分でも信じられない言葉。

(ちがう、そんな……乳首が気持ちいいなんて……男子が言っちゃ、だめなのに……っ)

羞恥で顔が熱くなる。

なのに、体は……。

口にしたその音だけで、乳首がびくり。

感度を測るように、左右交互にそっと爪が引っかけられていく。

くすぐったさと、びりびり痺れるような刺激のあいだで、乳首がびくびくと震えるたびに芯のあたりがじん、とし始めた。

「うん、そうだね。利生はね、乳首の先っぽをこうされるのが大好きな子なんだよ」

その言葉を浴びせられた瞬間、羞恥が一気に利生の顔に押し寄せた。

(や、やめて……そんなふうに言われたら……っ！)

「ほら、遠慮なく喘いでごらん？」

「……」

「寝所には僕しかいないよ」

意地を張ると、のけぞるほどのカリカリ攻めをされた。

それも長時間。

葛城は従順すぎる書生は好かないみたいだが、強情過ぎるのも嫌いらしい。

ついに言わされた。

「カリカリされちゃうと……あ……っ♡ 俺、あぁっ……♡ 乳首から、腰の奥まで、響いてきて……っ♡」

嫌なのに。

こんなの、絶対に変なのに。

感じたくなんて、ない……っ。

感じたくないのに、なのに……っ。

否定とは裏腹に、胸先へ落とされた刺激が、じわじわと体の中心へ向かって、熱を集めていく。

分かってしまう。

自分のなかに、感じる構造が、もう出来上がりつつあることを。

体に熱だけが溜まって、内側に溢れそうな何かが、じわじわとせり上がってくる。

(……だめ……っ♡ もしかしたら俺、乳首だけで……っ♡)

止まることなく続けられるカリカリの刺激。

爪が擦れるたびに、乳首から脊髄を駆け上がるような痺れが走り、それが鋭い熱となって、脳の奥をじりじりと焼き尽くしていく。

利生は、まだ一度も乳首だけでイッたことがない。

けれど、それでも分かってしまう。

今この感覚は、きっと――

絶頂の、前触れなのだと。

「ほら、どうだい？ こうやって爪で、カリカリ、カリカリってされるのは？ うん？ そうか。気持ちいいね？ ほら、ちゃんと口に出してごらん」

「……き、気持ちいいです……っ♡」

「いい子だよ、利生。素直じゃない君も可愛いけれどこうして乳首をカリカリされて、だんだん素直になっていく利生はもっと、可愛い」

爪先が乳首をなぞる。

軽いひっかきのような刺激に声が出てしまう。

「あ……っ、ん……♡」

「いい喘ぎ声だ。もうカリカリ狂いって言っていいね」



くすぐるような声色で問われるたび、胸の先はぴくんと震え、乳首の先っぽに充血が極まっていく。

「見てごらん。利生の乳首、まるで婦人の乳首のように、ふっくらしてきた。毎日、掃除も洗濯もして、学校では勉学に励んで、剣道で体も鍛えているのにね。それなのに、その胸の先だけは、こんなにも弱々しくて。ほんの少し、カリカリしただけで啼いちゃうんだ。ねえ利生。どうして男の子なのに、こんなにも乳首だけが、弱く育ってしまったんだろうね？」

嗜虐的な言葉が、まるで耳元で滴り落ちる蜜のように、利生の心に染み込んでいく。

「友人らにバレないようにね。利生の乳首が実は、雌乳首だってこと」

(雌、なんて……っ。そんな……っ)

否定しようとした、その瞬間には、もう遅かった。  
乳首を貫いた鋭い快感が、腰の奥を一気に突き抜ける。

勝手に浮いた胸が、恥じらいとは無関係に、葛城の指先をもっとと追いかけてしまう。

(どうして……俺の体、どうして、こんなふうに……っ。本当は誰よりも役に立つ書生でありたかったはずなのに)

「ああ、どうしようもなく敏感な雌乳首だね」

(あ……っ♡ だめ……っ♡ もしかしたら俺、乳首だけで……♡)

怖いくせに、体が勝手に、その先を知ろうとしてしまう。

(俺は……女じゃない……っ！ 雌乳首なんかじゃ……ないのに……っ)

ぷっくりと主張する乳首が、避けられない予感をいやらしく膨らませていた。

「利生。実は、乳首イキ——してみたいんだね？ 我慢なんてしないでいいんだよ」  
「……そんな、わけ……っ」  
「——ねえ、利生。素直になろうね」

葛城はそうやって利生の乳首を弾いてくる。

「あっ……あ……っ♡」

「そんな、切なげに泣いて。もう、体のほうは嘘をつけなくなってるよ？」

利生は、一瞬、言葉を失った。

唇がわなわなと震えて、どうしても言葉にならない。

(だめだ、こんなの……っ。言いたくない……のに)

それでも、快感が喉の奥を押し上げてくる。

「……し、したい……です……」

小さく、こぼれ落ちるような声。

「旦那様に……っ、乳首だけで……い、イかせて、ほしい……♡」

顔を背けながらの懇願は、まるで誰かに許しを乞うような利生の、最後の抵抗だった。

「よく言えた。じゃあ今夜ね」

「今夜？」

「じっくり乳首イき、させてあげる。これで利生も立派な葛城家の書生だ」

「でも、こ、怖い……っ」

怖いのは伊ってしまうことよりも、それを望んでしまっている自分だった。

「大丈夫。利生の乳首は、まだ未熟なもの。だから僕が、ちゃんと手伝ってあげる。しっかり“イける乳首”に育ててあげるから」

(手伝うって？ イける乳首に育てるって何？)

「じゃあ、ここからは大切な約束だよ。僕が『伊っていいよ』って言ったら、そのときは、葛城家の書生の誇りを持って思い切りイクんだ。いいね？」

(だめ、そんなふうに命令されたら……っ♡)

イきたくない、とあれほど抗っていたのに体の底から、とめどなく快感が吹き上がってきた。

まるで、「命令されたから反応している」みたいに。  
自分の意思じゃないのに。  
命令された途端に感じてしまうのが、なによりも情けない。

それでももう、止まらない。

(旦那様の言葉と指だけで、俺の乳首、イカされてしまう……っ)

涙で滲んだ視界の奥、くい、と引っ張られた乳首が葛城の指の中で弄ばれている。

感じすぎて、もう何かが溢れそうだった。

乳首は、まるで“雌の証”として悦びを誇っているみたいに、葛城の指の間で存在を主張していた。